様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 5 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2010
課題番号：19510247
研究課題名（和文）韓国軍のベトナム戦争参戦の記憶をめぐる韓越比較研究

研究課題名（英文）Comparative Research on Memories between South Korea and Vietnam Concerning Korean Armed Forces in Vietnam War

研究代表者　伊藤正子（ITO Masako）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：20327993

研究成果の概要（和文）：韓国民主化後、タブーであったベトナム戦争中の韓国軍による民間人残虐事件に関し、進歩的新聞社や市民団体によって事実の掘り起しが行なわれたが、退役軍人会などからは強い反発も出た。本研究では、韓国側の戦争についての多様な語りを検討するとともに、ベトナム側では、当時の韓国軍駐屯地周辺各省において現地調査を行い、ベトナム側における国家から村までの各級の事件に対する語りを分析した。その結果、韓越双方とも、政治体制や外交方針、地域の違いなどによって、戦争の記憶の語り方に様々な相違があることが明らかになった。現ベトナム国家は被害国にもかかわらず、国家間関係を優先するあまり、虐殺の生き残りの人々の記憶の語りを抑圧しているのに対し、韓国の市民団体は世論が分裂する中でも、負の歴史を明るみに出して未来の平和のために生かすための努力を続け、ベトナムでは公定記憶にならない韓国軍の「負の過去」を記憶しようとしている。

研究成果の概要（英文）：After democratization of South Korea, one advanced news paper company and the NGO made clear about some slaughters caused by the South Korean Army, but on the other hand, some ex-servicemen groups were severely against it.　In this research, I examined Korean’s each narrative about the Vietnam War, and also in Vietnam, I considered a variety of narratives according to each level from the State to villages.　As a result, it is showed that in both countries, narratives are different each other according to political systems, diplomatic policies, area conditions, and so on.　While the Vietnamese State, though damaged country by the war, has suppressed narratives by those slaughter survivors’ real memories because the State does not want them to influence the relationship between the two countries, the Korean NGO has tried to make efforts to clarify their negative history for the peace in the future and has tried to memorize their own “negative past”, which never becomes official memories in Vietnam.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	９００，０００	２７０，０００	１１７０，０００
2008 年度	８００，０００	２４０，０００	１０４０，０００
2009 年度	９００，０００	２７０，０００	１１７０，０００
2010 年度	９００，０００	２７０，０００	１１７０，０００
年度			
総　計	３５００，０００	１０５０，０００	４５５０，０００

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：ベトナム戦争、韓国軍、戦争の記憶、和解、NGO、公定記憶

１．研究開始当初の背景

研究費を申請した 2006 年当時、首相の靖国神社参拝などで中韓両国から歴史認識について依然非難を受け続けていた日本と比較し、ベトナム戦争中に自国軍隊が引き起こした虐殺事件について、大統領自らが複数回にわたって謝罪し、民間レベルでもベトナムに謝罪するキャンペーンが盛り上がった韓国から、日本が学ぶべきものを明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

戦争における加害の事実に直面した韓国社会の反応と、謝罪を受けた側のベトナムの人々の韓国に対する認識の変容を、両者の相互作用に注目して解明し、歴史認識をめぐる加害者側の葛藤と被害者側からみた和解や「赦し」の過程を検討する。

３．研究の方法

筆者はベトナム史が専門であるので、韓国側につてがなく、韓国での資料収集、現地調査とも初めての経験であったので、全面的に韓国人の知人たちの協力を仰いだ。まず、この問題を初めに新聞紙上で提起した市民運動家で当時ホーチミン市の大学で大学院生として研究に取り組んでいたク・スジョン氏に連絡をとり、彼女を通じて韓国側の記者、研究者、NGO 関係者、ベトナム戦争に参加した元兵士たちでベトナムへの謝罪運動に参加している方などを紹介してもらい、2008 年、2010 年と韓国に渡航して、インタビュー調査を行った。これらの際には、日本在住の韓国人の知人が通訳をしてくれ、また韓国軍が出している文書資料の収集、退役軍人会へのインタビューの手配などもお願いした。また韓国人のベトナム研究者からは、これまでのベトナム戦争に関する韓国人の先行研究をいただいた。ベトナム側での調査は、外国人によるフィールド調査は必ずベトナムの研究機関の受け入れとその紹介を必要とするので、社会学院という国家付属の研究所に依頼し、韓国軍が駐屯していた中部 4 省における調査許可を取得した。ベトナムは戦争の被害者であるので、この問題はベトナムにとって何の不都合もないものと筆者は当初考えていたが、研究を進めていくうちにわかってきたことは、ベトナム側ではこの問題は大きなタブーの一つであることだった。韓国との国家関係を悪化させる要因になりうると考えているためか、年を追ってベトナム側の規制は厳しくなった。しかし、省や県レベルでは被害者の救済や、犠牲者の慰霊などに積極的に取り組んでいるところもあり、それらの機関で、内部資料を手に入れたり、生き残りの人々に細かくインタビューさせてもらったりした。

なお、ベトナム中部の韓国軍駐屯地域、特にその一つのクアンナム省、クアンアイ省周辺は、ベトナム語中部方言が特にきつい地域であり、ハノイから同行したベトナム人研究者もしばしば聞き取り不能である場合があった。そのため、許可が得られたケースではインタビューを全て録音し、日本に留学している同省出身の留学生にテープ起こしを頼んだ。

現代史の調査であるので、文字資料収集はもちろんであるが、当時の戦争参加者、戦争被害者、そして現在、この問題にかかわる人たちからの生の声を集めることに力を注いだ。

４．研究成果

2007 年度はベトナム戦争中に韓国軍がおこした虐殺について、ベトナム側でどう記憶されているかを調べた。12 月にホーチミン市で「ごめんなさいベトナムキャンペーン」を行った元ハンギョレ新聞記者で、NGO を通じて被害者救済活動を行っているク・スジョン氏にインタビューを行い、彼女の活動の歴史や背景、現在の NGO の活動状況について聞いた。その後 2 月に再度渡越して韓国軍が駐屯した地域のうちビンディン省を訪問、省博物館にて 80 年代末に博物館が作成した証言集などの資料を収集した。そしてテイフオック県の二村を訪問して虐殺を生き延びた人達にインタビューし、県や社が独自に、或いは韓国の様々な組織の援助で建設した記念碑を観察してまわった。更にダナン市郊外のハミ社をク・スジョン氏と共に訪問、彼女が懇意にしている被害者達から話を聞いた。そ

の後ビンディン省に戻り、数週間のうちに850人もの被害者を出したテイソン県テイヴィン社を訪問、追悼式典に参加した。調査を通じ、ク・スジョン氏らNGOの活動が活発かどうか、或いは被害者・生き残った人の双方が多い地域と、集落ごと絶滅に近い状態においやられた地域など条件が複雑にからみあい、和解の過程も様々であることが明らかになった。また、この問題についての記憶の仕方が、虐殺を経験した地元と、韓国との良好な二国間関係を維持したいベトナム国家のあいだで大きくずれていることも、碑文の修正問題などを通じ明らかになった。家族を失い自身も身体障害者になった多くの虐殺被害者たちが、ク・スジョン氏達との交流を経て癒されて来た過程を理解でき、加害国の人々が真実と向き合えるかどうかが、真の和解に通じることを明らかにできたことが大きな意義であった。

2008年には8月に韓国に渡航し、ソウルにて「ごめんなさいベトナム」キャンペーンを行ったハンギョレ21(週間誌)の編集者、コ・ギョンテ記者と、「韓国現代史」の著者で、聖公会大学のハン・ホング教授などに会い、キャンペーンの過程や韓国世論のベトナム戦争参戦に関する世論の変遷についてインタビューを行った。参戦兵士のインタビューを日本人が行うのはかなり困難だが、通訳を依頼した友人、パク・ナムギュ氏のご好意により、仕事のため大邱から光州を訪れていた彼の叔父から直接ベトナム戦争に青龍旅団の一兵士として従軍した時の体験も聞くことができた。さらにソウルの戦争記念館を訪問して、ベトナム戦争参戦についての国家レベルの公定の記憶について書かれた資料を収集した。また2月にベトナムに渡航し、虐殺の生き残りの人々を助ける活動をしている韓国人歴史家、ク・スジョン氏についての映画を製作したベトナムの映画監督のヴァン・レー氏を訪問して、映画を鑑賞させていただいた。またクアンナム省と同省ディエンバン県で、虐殺事件に関する資料収集を行っている部署や、韓国NGOを受け入れている部署でインタビューを行った。また計3つの村に出向き、生き残りの人々や村の幹部から虐殺の状況や、90年代末からの韓国との交流について具体的な話を聞き取りした。韓越両国で様々な立場の人々の話を聞くことができ、韓国世論の分裂をひしひしと感じると同時に、被害国にもかかわらず、経済援助を得るために、歴史にフタをしようとするベトナム政府が、結局自国民の多様な歴史の記憶の仕方を抑圧している状況も明らかになった。このテーマの全体像を描くだけの基本的資料を集めることができたと言える。

2009年度は6月に韓国晋州市の慶尚大学で開かれた、韓国東南アジア学会と京都大学東南研の共催シンポジウム(The First KASEAS & CSEAS Joint International Symposium)に参加して、本研究について「韓国軍のベトナム派兵をめぐる記憶の比較研究-ベトナムの非公定記憶を記憶する韓国 NGO-」のタイトルで報告を行った。韓国ではベトナム戦争参戦については、その評価をめぐり世論が分裂しているので、シンポジウムでも、それを反映して世代によって反応が異なったが、韓国人自身が研究しにくいことを、日本人が取り上げたことは、驚きをもって迎えられた。また8月末から9月にかけてベトナムに渡航し、国立第2公文書館で、南ベトナム政府の韓国派兵に関するベトナム語資料の収集を行った。また韓国軍が駐屯していた地域のうちの一つ、フーイェン省を訪問して、文化局と省博物館で関連資料の収集と韓国との交流の発展についてインタビューを行うとともに、ベトナム人虐殺が派生した村々(ドンボア県、トゥイアン県、テイホア県)をまわり、生き残りの人たちから当時の様子、韓国 NGO の活動、韓国への思いの変容、現在の韓国との関係などについて話を聞いた。さらに、韓国のハンギョレ新聞が「ごめんなさいベトナム」キャンペーンによって集めた寄付で建てられた「越韓平和公園」も訪問して、建設のいきさつや過程についてインタビューを行った。2007年度から開始した本研究では、ビンディン省、クアンナム省、そして今回のフーイェン省と調査したが、その結果、この問題への現在の対処の仕方が、省によってばらつきがあり、戦争の傷跡をめぐる「和解」の進展の仕方もまた異なっていることが明らかになってきており、真の和解を成し遂げるための様々な条件を考える材料を提供してくれている。

2010年度は8月末～9月初めに韓国に渡航して、ベトナム戦争に参戦した韓国兵で虐殺について証言している人と、逆に派兵の正当性を主張している退役軍人会を訪問してインタビューを行った。さらに当時ベトナム参戦に備えて兵士を訓練していた北朝鮮国境に近い江原道に、2008年にオープンした「ベトナム参戦勇士出会いの場」（派兵記念館）を訪問し、ベトナム戦争参戦がどのように顕彰されているかを調査した。その結果、ベトナム戦争参戦をめぐる評価に関して二分されている韓国世論の対立が、保守政権の下で先鋭化している状況が明らかになった。またそのような現状をベトナム国内に知らせようとする韓国 NGO の活動についても聞き取りを行ったが、歴史に真摯に向き合おうとするそのような活動は、表面的に良好な外交関係を誇示しようとする両国政府から、圧力を

受けている現状も明らかになった。ベトナム側では、米軍の大規模な基地のあった中部ダナン市周辺のクアンガイ省を3月に訪問した。韓国軍は当地で米軍との合同作戦などを展開しており、その過程で複数の虐殺事件が発生しているので、虐殺の生き残りの人々を訪問してインタビューを継続した。しかし今回は、上記の韓国 NGO の活動が理由だと推測されるが、ベトナム側がこの問題が韓国政府との関係に影響を与えることを警戒していることが感じられ、行く先々で「歴史研究は現在の両国の友好関係を増進するためのものでないといけない」と説教され、また昨年度までの他省での調査では可能であった虐殺の生き残りの方々の自宅を直接訪問してインタビューすることも認められず、村役場での集団でのインタビューとなったので、以前ほど「本音」の話は聞けず、ほとんどの人がベトナム国家の「公定史観」を口にしていたのが残念だった。ベトナム国家が国民を末端まで統治する力はかなり強力なものであることを再確認することとなった。

【まとめ】韓国の NGO や進歩派新聞社などの自国の負の歴史を明るみに出し過去を教訓にして未来に生かそうとする活動こそが、韓国軍の虐殺を生き延びたベトナムの人たちの心を解きほぐし、記憶を捻じ曲げたり過去にフタをしたりすることによってではなく、記憶を新たにすることで、赦しと和解が生まれていく過程を明らかにすることができた。これが一つ目の研究成果である。一方で、ベトナム国家は一見、過去を水に流す未来志向の美しい志にも響く「過去にフタをする」というスローガンの下、「国家利益」を優先し、現政権への貢献には乏しい虐殺事件の被害者の声を、韓国国家との外交・経済関係を優先するあまり封殺している。言い換えれば、共産党一党独裁により、国家の公定記憶が不動のものであるベトナムでは、韓国軍によって引き起こされた悲劇の記憶は国家レベルでは継承されないのに対し、市民運動が強い力をもつ韓国においては、国内から大きな反発を受けながらも、「負の記憶」を引き受ける動きが続いている。つまり、二つ目の成果としては、被害国と加害国における戦争をめぐる公定記憶と、公定記憶にならない記憶の交錯や、国家体制と記憶の多様性の関係について明らかにすることができた。
本研究の総合的なまとめについては、現在著書を執筆中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
伊藤正子「韓国軍のベトナム派兵をめぐる記憶の比較研究－ベトナムの非公定記憶を記憶する韓国 NGO」『東南アジア研究』査読あり，48 巻 3 号，2011 年，294-313 頁

〔学会発表〕（計 1 件）
伊藤正子「韓国軍のベトナム派兵をめぐる記憶の比較研究－ベトナムの非公定記憶を記憶する韓国 NGO」
The First KASEAS・CSEAS Joint International Symposium, 2009 年 6 月 19-20 日, 韓国晋州・慶尚大学

〔その他〕
ホームページ等
http://kyoto-seas.org/ja/2011/04/%e6%9d%b1%e5%8d%97%e3%82%a2%e3%82%b8%e3%82%a2%e7%a0%94%e7%a9%b648%e5%b7%bb3%e5%8f%b7-2/

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　正子（ITO Masako）
京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：20327993

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：